

## 生活美学から環境文化学へ

### 一、風俗学から

生活美学をはじめの前に、まず風俗学という発想があった。

宮城前広場で若い男女が二・五メートルおきにカップルをなして並んでいる。昭和四十年(一九六五年)ごろ、『朝日ジャーナル』のグ Labiaでその写真を見たときの文化ショックを今も忘れられない。それから一、二年後、京都・鴨川の河原に同じ集団分布の姿を毎年のように見かけるようになった。

「橋がある。その橋の上に二・五メートル以上でも以下でもない。お互いが見えたり聞こえたりする。しかも二・五メートルという間隔によってプライバシーは侵されない。同時に、もし暴漢に襲われたりすれば、きやつと叫び、付近の人たちが、わつと騒いでくれるだろう。そういう社会的安全感の中の孤立というこの感覚は、不思議な感覚だと思う。かつて世界のどこにもあらわれなかった感覚だと思う」(多田道太郎『風俗学』一九七八年、筑摩書房)

多田 道太郎  
岩城 万里子

この文化ショックが、風俗学事始めになった。「今」「目の前」で何かがおこりつつある。過去形の文化論ではダメだ。「風俗学」を始めよう――

それまで、日本には独自の「民俗学」というものはあった。農村でおこり保たれてきた古き良き慣習。そのほろびゆく寸前の姿を愛惜の気持ちこめて記録にとどめようとする。柳田国男(一八七五―一九六二)、折口信夫(一八八七―一九五三)――それぞれが個性的な民俗学を大正、昭和時代を通じて作り上げてきた。

しかし、一九六〇―七〇年代には、古くからの慣習はほろびゆく寸前、ではなくほぼ完全にほろびてしまい、とくに都市部では、都市民俗学という苦しまぎれの言葉をつかい、分野確定するほかない。そういう状況が、ぶきみな姿をあらわし、巨大化しつつあった。

こういう時には、都会における変化の感覚というものを法則化しなければならぬ。生活の中の、感覚的表現の何かが、無意識にひっかかっている。それをたとえば街なら街を取り上げて、十年間の変化を定点観測する。

「街の風物、事物、モノはことごとく記号である。変化しつつある大衆の感覚をあらわす記号である。それは大衆の未来へ向けての願望の表現であり、しかも同時に、過去の亡霊への懐旧の念の表現でもある。矛盾し、葛藤しつつある心持ちの表現として、街があり、通りがある。私たちの読み、解釈を待っているテキストである」(多田、前掲書)

定点観測を最初に提唱したのは坪井正五郎(一八六三—一九一三)である。今和次郎(一八八八—一九七三)はそれを考現学にした。その考現学を受け継いだのが日本生活学会であり、一九七六年に発足した現代風俗研究会、通称、<sup>ゲシブイシ</sup>現風研である(注1)。

ミミズのように大地をはいながら、しかも鳥のように大地を見下ろす視点はないものか。こういう複眼づくりのために、私たちは、少なくとも十年間続けて、ある観測できる場所をつくりたい。観測できる同志たちの場をつくりたいと考えた。

## 二、生活美学へ

そして風俗学から生活美学へ、大きく舵を取り直したのは、一九八〇年代末になってからのことである。

当時、生活学や家政学の分野において盛んだったのは、ライフスタイル論である。しかし、アメリカ流生活水準の高みから世界の生活を見下ろし、それぞれに評点をつけるといふ姿勢でいいものか。自分の身辺、身近なモノや空間への興味、という立場をしつかりもちながら、空間や時間の幅をもっと広げてはどうか、という知的冒

険に乗り出すことにした。

時間的には前世紀半ば、空間的にはスコットランドという僻地グラスゴーを足場に、世界の美に挑んだマッキントッシュ(一八六八—一九二八)。フランスの片田舎から出てきたガレ(一八四六—一九〇四)。彼らの仕事をのちにアール・ヌーボーと呼ぶが、彼らには理論的權威も政治的、経済的優位も何もない、大衆から出て、大衆に美の呼び声を届けた。そしてジャポニスムもアール・ヌーボーの一例にすぎない。

さらに時間的に大きくさかのほれば、玉やイレズミという縄文美の現代への呼び声がある。現代若者のピアスや刺青ファッションには、太古と現代とが双頭の蛇のようにがっちり食いあう美の世界がある。

これら美の世界を、学問の世界に取り入れたのは、二百年前、ドイツのシラー(一七五九—一八〇五)が『美術芸術論集』(富山房百科文庫)に、そして、現代アメリカではベイトソン(一九〇四—一九八〇)が『天使のおそれ』(父娘の共著、青土社)を著わした。ここに見られるのは、科学(自然科学も含めて)に対する、美の指導性である。

## 三、美と美学

生活というものをもっと美的な角度からアプローチしなくてはならない、そういった生活美学の思想は、もともとアメリカの家政学の一分野に開かれていたものである。そのため、進駐軍の占領下にあった沖縄において、一九五〇年、アメリカのミシガン州立大学をモデルに琉球大学が開設された際、そこで開講されたのが、日本に

おける生活美学の最初の講座となった(注2)。

ところが、一八世紀バウムガルテン(一七一四-一七六二)の時代からつづく学問としての「美学」には、「美」そのものとは違い、美をどう理論づけるかにすぎないという疑いがある。小林秀雄に、「美しい花がある」だけで「花の美しさというものはない」という言葉があるように、美しいものの自体から美を感じることは、学問とは別のことではないか。

たとえば、大学で行われている美学の講義は、カントやヘーゲルの祖述のあとを追い、学問の体系的の中に組み込まれている。芸術大学においても、歴史や理論を教わる「芸術学」に傾けば、おのずと「芸術」の実践は薄れる。そうした芸術学の問題とよく似た状況が、生活美学にもある。

そのために、アメリカの大学では比較的早くから芸術的、美的方向というものが模索され、日本においては、一九八〇年代ごろから、「それはオレの美学じゃねえ」や「男の美学」というような、美学の普及化が一種の社会現象としてあらわれてきた。

生活美学には、「芸術」と「芸術学」、「美」と「美学」の裂け目と両義性のはざまで、この十年、二十年、私たちが感覚的に悩み続けてきた痕跡が残されている。

#### 四、変化へのトリップ

今の時代に「美」だなと感じるものを、素直に挙げてみよう。筆者(多田)の場合は、俳句や詩が多い。あるいは、作家木山捷平(一九〇四-一九六六)氏の作品。たとえば「下駄の腰掛」という私小説

がある(注3)。銭湯へ出かけた木山氏が、風呂屋の開くまでの待ち時間に、下駄をぬぎその上に腰をかけると、そこからすーっと、日常生活とも、学問としての美学とも違う、下駄の開く、非日常の想像の世界が目の前に広がるという話である。

「前の道のアスファルトが日にやけて、かりにも涼しいとは言えないけれど、頭を天日にさらしているよりましなので、私は下駄をぬいでキッチンと二つならべ、その上にべたりと腰をおろした。／そこで退屈しのぎに、私は過去五十何年間を回想してみた」(木山捷平「下駄の腰掛」一九五九年九月)

あるいは、放心状態でブランコに乗り、自分の脱ぎ捨てた下駄から夢想の世界に入っていくなど。下駄をさまざまな形に置き替えてみる。そうすると、美が下駄という素材を通じて浮かんできると。——詩や俳句で言葉を置き替えることで美が浮かんできると。散文のイメージからさえ、美が浮かび上がる。これは、日常の中の素朴な素材を使い、そこに美を感じる、ひとつの例ではないか。

哲学の文脈で美を論理的にどう表わすか、そのことに学問のおもしろみはあっても、それだけで美はくみとれない。小説や音楽など、ヘンだな、なぜこんなに気持ちが悪くんだろうという小さな発見から、美というものが自分の中で動く瞬間が理解できる。日常感覚をフツと乗り越えたり、ズラされたりする個人的な体験——変化へのトリップがなければ、美学も醜学もない。

## 五、着想

美的なものがなければいっさいの科学的根拠は失われる、といったことを書いているのは、元東大総長の吉川弘之氏（一九三三～）である（『テクノグロブ』工業調査会、一九九三年）。学問には三つのレベルが必要だとも書かれた。abduction（仮説あるいは発想、着想）、deduction（演繹）、induction（帰納）の三つのことである（注4）。

一般に、科学は、仮説である程度定義して、それを演繹し、帰納的な実験で実証する。ここには、仮説の根本がありがたいかどうか疑う余地はない。定義することに反対ではないが、根源的なこと、最初の着想（abduction）には、奥深い人間的な根拠があったほうがいい。おもしろいな、ヘンだな、と感じる。美の、あるいは、詩の、科学に対する指導性である。

## 六、変化する環境意識——土地から情報へ

一方、環境文化へのアプローチについては、一九九〇年に筆者（多田）が、「都市教育と価値教育——自然環境から都市環境へ」という論文を書き上げた（『日本の環境教育』河合出版、一九九一年所収）。中心テーマとしてとりあげたのが、大阪という「土地」である。

律令国家が水田を租税の基礎として以来、「土地」というのは、米作りとその流通によって量化されるものであり、それはバブル崩壊後の今日にいたるまで変わらない。

かつてその大半が海であった大阪平野も、河川の土砂が堆積していく自然の「埋め立ち」と、人工の「埋め立て」とでできあがった

「土地」である。米をつくり、商工業をおこしてきた（注5）。この「土地」が、地球温暖化という環境危機にさらされ、一転して、量化されてきたそれは、汚染され破壊される環境という「情報」として意識されはじめる。そういう変化がおこった。

それまで、大阪湾や瀬戸内海などの埋め立ては、世界の気象学者が予測する八千年後の氷河期到来に先立つ、日本列島の陸地化進行の一断片にすぎないと漠然と考えられていた。ところが、温室効果ガスによる地球の平均気温の上昇は、二十一世紀半ばに海面水位を二〇～一〇センチメートル上昇させてしまうという発表がなされた（気象庁、一九八九年二月）。一方では海が前進し、他方では後退する。このくいちがいはどうなるのか。気象学者根本順吉氏（一九一九～）の、信頼すべき予言を、不安とともに信ずるほかない。

「およそ八千年後には次の氷期の到来することは大方の学者の一致した見解だが、他方この十数年はこの傾向とは全く反対の異常昇温がつづいている。これらの相反する傾向は、おそらくあるパラメーターが限界に達したときカタストロフを起こすことになるであろう。しかし、具体的にそれがどのような形をとってあらわれるかは誰も予想していない。」（根本順吉「異常気象の真犯人」『文藝春秋』一九八八年十月号）

## 七、情報から情報の質へ

浄化力に富む水をたくわえてきた葦原などの自然を都市化してきた大阪平野は、今でも経済価値をもつ「土地」であるとともに、危

機能的状況の環境という「情報」でもある。その「情報」に、今後どのように対峙していこうとするのか。私たちは環境意識、「情報の質」の選択にせまられている。

大阪湾沿いに広がっていた葦原を愛した詩人、小野十三郎（一九〇三—一九九六）は、次のように応えている。

#### 完全な日常について

この海も

この葦原も見えない。

このたくさんな煙突や瓦斯タンクも見えない。

毎日近くで見えると

眼が慣れてしまふのだ。

それはしだいにあたりから消滅し

かつてそれがそこにあつたことも忘れられる。

ここにきて

二十年になる

とその人は云ふ。

海や葦原が消えてゐても不思議はない。

その風景を信じる。

小野十三郎

『風景詩抄』湯川弘文社、一九四三年

自然も都市も過去も現在も、矛盾するふたつのものを、ともにかかえていこうという、詩人の姿勢である。

#### 八、文化について

日本でその詩「荒地」が愛読され、一時期、荒地グループと呼ばれる詩人の一派のできるほど熱烈に受け入れられた、詩人、T. S. エリオット（一八八八—一九六五）は、文化について次のように言っている。

「人為的に奨励されるとき諸々の文化活動について語る場合、われわれはその各々の活動をそれに固有の名稱によつて呼ぶことが望ましいのであります。繪畫、彫刻、建築、劇場、音楽、また科学やその他の知的操作の一部門なり他の部門について、われわれはその各々の活動に固有の名稱によつて呼ぶことにして、一つの包括的な名稱として『文化』といふ言葉のみだりに使用しないことによつて着實に各々その道の仕事にいそしむことにしようではありませんか。何ゆゑかといへば、無難作に文化を口にするによつてわれわれは、いかにも文化といふものが計畫され得るものであるかのごとき獨斷に滑り込むからであります。文化は決して全局面的に意識的になり得ない——あらゆる場合に、われわれの自覺し得るよりも遙かに以上のものが文化には屬してゐるのであります。文化は計畫し得ない、何となれば、われわれすべての計畫の無意識の背景をなすものが、また、文化だからであります。」(T. S. Eliot, "Notes towards the Definition of Culture", 1948/深瀬基寛訳『文化とは何か』清水弘文堂、昭和四十二年)

文化は、ものごとすべての根底にある。しかし、文化一般を問うことはむずかしい。特定分野を限定することのない代わりに、時に「矛盾」の生じることもある。科学（化学）と芸術（詩）が、互いに相入れないと考えられてきた例でもわかるように。

## 九、矛盾の深化

環境をめぐる文化についても、科学的アプローチの中での環境と、文化的アプローチの中での環境という、「矛盾」がある。ダイオキシンなどの規制基準の厳密さと、環境意識の敏感さ、質の異なる「矛盾」はどこでつながり、どこで切れるのか。矛盾の収斂、矛盾の直視、矛盾の深化を実践しようとした人に、詩人の宮沢賢治がいる。科学者、高木仁三郎氏（一九三八）の卓見である（注6）。

原子核化学を専攻した高木氏は、大学の研究職を退き、一九七五年、原子力資料情報室の設立に参加した。以来、プルトニウム計画の問題点を国際的に明らかにしてきた功績は、多田諺子反権力人権賞（一九九二年）につづき、「環境のノーベル賞」といわれるライトライフ・フット賞（一九九七年）をマイケル・シュナイダーと共に受賞し、たたえられた。

チエルノブイリ原発事故の前から、原子核化学者として、高木氏は、原子力の安全性を疑う姿勢をゆるめることはなかった。「人間的な場に科学というものをどのように戻すか。私たちなりの、人間の顔をした科学をつくるのがどうやらたうたできるか」と悩みつづけた高木氏にとって、賢治は自分の先駆者であり、その詩は啓示に満ちていた。

「われわれはどんな方法でわれわれに必要な科学を  
われわれのものにできるか」（宮沢賢治）

高木氏によれば、宮沢賢治（一八九六一九三三）の科学観が一番よく表れているのは、「グスコブドリの伝記」（発表誌「児童文学」一九三三年三月十日）よりも、その初期形となった「グスコブドリの伝記」の中の、次のような部分ではないか、とある（高木仁三郎「宮沢賢治をめぐる冒険」社会思想社、一九九五年）。それは、ペンネンナム技師が、ブドリに語っている言葉である。ふたりは共に、イーハトーヴ火山管理局に勤めていた。

「この仕事といふものはそれはじつに責任のあるもので半分はいつ噴火するかわからない火山の上で仕事するものなのです。それに火山の癖といふものはなかなかわかることではないのです。むしろさういふことになると鋭いそして濁らない感覚をもった人こそわかるのです。たゞさういふ感覚をもった人がわかるだけなのです。私はもう火山の仕事は四十年もして居りましてまあイーハトーヴ一番の火山学者とか何とか云はれて居りますがいつ爆発するかどっちへ爆発するかといふことになるかそんなにはきき云へないのです。そこでこれからの仕事はあなたは直観で私は学問と経験で、あなたは命をかけて、わたくしは命を大事にして共にこのイーハトーヴのためにはたらくものなのです。」（異稿「グスコブドリの伝記」）

前の文章に、「科学の二面性というものがはつきり出ている」と高木氏は言う。

「一方には、このペンネンナム技師が表しているような、経験を積んだすぐれた科学者というものがあります。このような科学者＝専門家の存在というのは、なにごとをやるのにもどうしても必要となります。なおかつ、それによつてすべてがわかるというのではないのです。人間の知によつて、自然がすっかりわかってしまうことは決してない。そんなような驕る立場に科学者ははいけません。／そして、実際に生きている人間の直観のほうが、科学的知を超えて物事の本質に迫るといふ瞬間もある。」（高木仁三郎、前掲書）

「賢治は詩においてよりも童話において一層詩人である」とは、寺田透（一九一五―一九九五）の言葉である。

宮沢賢治の世界にしながら、NGOを設立した高木仁三郎氏。予測のつかない火山活動を前に「直観」と「学問」とを指さした、ブドリとペンネンナムの両方の役を、高木氏は、癌におかされたその身ひとつに負っている。

「グスコンブドリの伝記」の物語の最後で、ひとりカルボナード島に残り、火山を爆発させ、イーハトーヴの寒気を救ったブドリは、これまで自己犠牲として解釈されることが多かった。高木氏は、それをエコロジの文脈で読み解く。

「作品の一番最後のところは、『そしてちやうど、このお話

のはじまりのやうになる筈の、たくさんのブドリのお父さんやお母さんは、たくさんのブドリやネリといっしょに、その冬を暖かいたべもの、と、明るい薪で楽しく暮らすことができたのでした。』といつて終わっている。これは単にメダタシ、メダタシではなくて、むしろ、ブドリの試みというのが、また新しいブドリやネリに伝わって行くという、エコロジの言葉でいえば、一種の循環ということを示しているのです。一つの死が次の生につながって行くという、仏教的にいえば輪廻ということになるでしょうか。（中略）放射性廃棄物というのは一つの一方的な死でしかありません。原子炉の核燃料が死んだ成れの果てです。これは新しい生へは繋がりません。そうではなくて、一つの死が新しい生に連がるような在り方、これが共に生きるということです。（中略）こういう時間を超えたというか、いやむしろ時間の流れを包含したというべきでしょう。そういう通時的な共生というものが、いま、私たちがエコロジという言葉の中にかける意味なのです。」（高木仁三郎、前掲書）

「人間的な場」から科学が離れていくことに疑問をもつ、一部の若い研究者たちは、高木氏のもとを訪ねる。彼らの悩みに耳を傾け、長時間話し込む。高木氏が、現在もとても熱心に取り組むライフワークである。

## 十、詩人であること

韓国の詩人、金芝河（一九四一）の言葉を紹介しておこう。  
散文ながら、詩がある。

「環境は環境ではない。それは生命だ。スズメとリスと花と草木は環境ではない。それは生命だ。土と水と空気とは環境ではない。それは生きている生命だ。自己再生能力のある有機物だけが生命ではなく、循環し相互に関係しあい多様に自己を組織するすべての自然が生命だということは、宗教ばかりではなく現代科学の偉大な結論なのだ。（中略）すべての個体生命は多様だがたがいに循環し、たがいに関係しあう全体であり、目に見えない不生不滅の生成進化する宇宙生命、自己を組織する宇宙生命に仕える永遠なる生存である。人間である私は草であり、花であり、スズメであり、リスであり、水であり、空気であり、土であるのだ。」

「生命が危うい。人の生命の保護と治山治水は政治の根本である。この根本が成り立っていないのだ。だが、環境問題はたんなる政治だけの問題なのであろうか。価値観の問題であり、生産様式・生活様式の問題・文明の問題なのだ。」（金河芝生のちを語る）一九九五年

科学技術文明に対抗できる拠点は、詩である。心といってもいい。ニュージーランド先住民マオリ族によれば、文化は、心である（注

7）。芸術、詩、心という文化をもって、科学技術文明（文化）を見据え、環境学をやっている——

一九九七年に設立された、当環境文化研究所の共同研究の成果は、『人の心と自然環境』（一九九八年、カタログハウス）と題する書物に収められている。

## (注)

1 桑原武夫氏、鶴見俊輔氏、橋本峰雄氏、井上俊氏らとともに立ち上げた現代風俗研究会は、のちに社団法人となり、今も若者を中心に活発な民間研究活動を続けている。（問い合わせは木曜午後、電話075・752・2892）

2 生活美学は、一九五一年九月にミシガン州立大学から第一次派遣教授団として来沖した、E・エリナー・デンスモアによって、一九五二年より正式に開講された（横川公子「生活美学の歴史」『フアション学のみかた』（朝日新聞社、一九九六年）

3 書生下駄とも呼ばれ、学生がカラコロと下駄を履くような、大衆的な下駄履きの風習は、比較的新しいものである。下駄は、もと農作業用の田下駄にはじまるが、山（田舎）ではなく、里（町）で下駄の履かれるようになるのは、元禄時代に駒下駄が、男性の湿地用、女性の雨天用として用いられてからのことである。吉宗將軍のころによく、晴天時にも男性が日和下駄を履くようになった。それまでは、日常的な履き物といえば、もっぱら草履であったわけである。ゆえに、木山氏の小説の中にあるような大衆的な下駄のある風景は、民俗史的には、新しい風俗である。

4 ①アブダクション ②ディダクション ③インダクションを「探究の三段階」と規定したのは、パース（一八三九—一九一四）である。

5 大阪文化は「埋め立て文化」である、という指摘は、多田道太郎「環



境から文化へ」に詳しい。(『人の心と自然環境』所収) 大阪平野の埋め立て史は、大阪文化を理解し、エコロジーの文脈で考えていく鍵になる。

6 カレン・コリガン・テイラー氏(アラスカ大学)も、『宮澤賢治ほど科学と文学の間に自由に横断できる作家は見つからなかった』としている。(カレン・コリガン・テイラー「宮澤賢治とエコクリティシズム」『文学と環境』創刊号、一九九八年)

7 元マオリ省の文化次官として文化復興を推進した、マオリのカラ・プケタプ氏の言葉。『世界を見、何が起きているかを知り、マオリはマオリの『ころ』を持つていると気づきました。マオリ語でいう『ころ』の意味は——英語の「カルチャー(文化)」とは違うものだど理解しました。最も大きな変化はむやみに現代化を追うのではなく、マオリとして『現代人』になろうとしていることです。(中略) マオリの『ころ』を失ってはいけません。』(NHK教育TV、一九九九年一月三十日放映)

#### (参考文献)

- ・多田道太郎「文化ショックから始まった」(『ファッション学のみかた』朝日新聞社、一九九六年)
- ・多田道太郎×原章二、鹿島茂、竹田青嗣「生活美学入門1-3」(『広告批評』マドラ出版、一九九七年四-六月号)

\*生活美学の研究についてはヒューマンルネサンス研究所の協力を得ている。

